



国土と言葉

三

本多弘之

honda hiroyuki

浄土を表す言葉は、精神空間の言葉である。自然科学が相手にするような、物質的実体に関わるものを表す言葉ではない。人間の精神空間には、いわゆる物質的実在を認識する科学的知性からは、把握され得ないものが力をもっている。これを仮に「精神的実在」とでも言おうと思う。

例えば、すでに亡くなっている肉親があるとしよう。これは物質的実体としては、この

世には実在しない。しかし、残された遺族にとつては、決して何のはたらきもなくなくなってしまうというのではない。思い起こすたびに、時には励まされ、時には慰められ、時には叱られるような精神的実在が起るのである。この世に実在しないものであっても、実在するもの以上に、精神的な作用を引き起こすのである。

この場合は、すでに他界しているとはいえ、

一度はこの世に実在として存在し、生きて関係をもったものだから、精神空間の言葉などと言わないでも良いではないか、といわれるかもしれない。では、直接に触れたことがない場合、例えば、二〇一一年に七百五十回御遠忌を迎える親鸞えんという人の場合を考えてみよう。

七百年以上も前に亡くなっているのだから、現在生きている人間にとつては、語り伝えら

れた物語か、書き残されている言葉のみが、その人を知る手がかりである。つまり、言葉になった実在と言っても良いかもしれない。言葉はあっても、それは現在の実質的な実在を指示するものではない。七百年以上もこの世にはなかつたのだから、実体的には何も無いといふべきだろう。けれども、親鸞についての言葉は、単に過去の現象を記述したものに止まらず、現に大きな精神的なはたらきを起こしてくる。

親鸞という過去の人物に起こった精神的な事実は、彼自身にも、さらにその過去から伝承されてきた仏教の精神的事実なのであろう。それを掘り起こして、万人が納得できる言葉や論理として、書き記そうとしたものである。その精神的現実の特質は、万人の生存の苦悩を、われひと共に克服して、平等の存在の尊さを回復しようという方向を求め続けていることであらう。

これを仏教の伝統的な表現では、「自利利他」という言葉に集約している。この課題を自己の根本的な意欲としよとすることが、「菩薩道」である。この菩薩道の意欲を、一切の衆生の救済に広げ、三世十方の衆生を包もうとするのが、無限なる「大悲」のこころであらう。

大悲という課題になるとき、この濁世では救われる可能性すら与えられない「罪濁」の

衆生の救済が根本問題となる。この意欲を表現するための吟味に、「五劫思惟」という時間がかかったと『大無量寿経』は語る。この時間は、文字どおり「時間」の長いことを表す意図ではなく、ほとんど文字や言葉には定着できないような深層の願心を掘り起こせよとするための言葉なのではないか。京都の広隆寺にある弥勒菩薩の半跏思惟像の魅力は、不思議な微笑の影に、ほとんど解決不可能な衆生救済の方法を思惟し続けようとする意志があるからではなからうか。法蔵願心の言葉は、この大悲の思惟を衆生に呼びかけるための表現なのである。

かくして言葉が、この世の有限な人間精神の現象を記述するのみではなく、人間の迷いを翻して矛盾を突破させ、ほとんど不可能とも言える罪濁の衆生をも救い取ろうとする大悲の願心を表す言葉となる。この次元の言葉は、現代社会を忙しく生きているわれらの日常生活のレベルからすると、物質を表現する言葉と精神を表す言葉との距離以上の距離があるのだと思う。

言葉について感ずる背後のもの、例えば「原爆」という言葉に、その物理現象のみでなく、現実に被爆し、後遺症に日々苛まれて苦悩する人びとの痛みに、なにかの同感を感じ受ける、そういう意味の言葉の背景への同心同感という問題もある。これをもつことが人間

の精神生活にとつて、人間存在の課題をともに生きていることの大切な意味でもある。

この同感を喪失するならば、言葉は背後の重みや深みを失って、いわば平面的な記号のようなものになってしまう。仏教の言葉で言うなら、大悲の深層を失って、日常レベルの浅い無味乾燥なものになってしまう。

「浄土」とは、かくして大悲心が「莊嚴」する言葉のだと言われる。煩惱罪濁の衆生に、あなたたちを救いたいという悲願を、形ある場所のごとくに語りかける。十七種の莊嚴功德をもつて、浄土とは「十七句これなり」と『浄土論』では言う。形を語る言葉が、浄土なのだという。この言葉をとおして、われらの浅薄な日常性の背後に、仏法が見とおしている深遠なる存在の意味が語り表されているということなのであろう。

この莊嚴を総合して、「報土」という。成就することができないほどに広大で深遠な大悲（許され得ないような罪の深さや、業報の重みを背負った衆生をたすけ遂げようとするのであるから）、それが成就した場所を、「願に報いた」場所だという。この表現も、われらには、良くわからない言葉ではある。言葉に付帯する深層のわからなさなのであろう。

(ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長)